

Title	先生にはじめてお会いした頃
Sub Title	
Author	遠藤, 周作(Endo, Shusaku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.362- 363
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0362

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ている。(二九八二・七)

(本塾大学名誉教授)

先生にはじめてお会いした頃

遠藤 周作

「君たちの先輩に白井浩司君という優秀な人がいる。」
と私たちは仏文科の時、当時講師だった佐藤朔先生に
時々、そうきかされていた。

昭和二十年―終戦直後の三田は図書館も大講堂も焼け
残った校舎の三分の一まで進駐軍に占拠されている状態
だった。しかしふたゝび勉強できるといふ悦びで仏文科
に進学した私は、講義に出てみて真実がっかりした。楽
しみにしていた佐藤朔講師が休講である。あとのI教
授、G講師の子供だましのような授業のなんと詰らな
かったことよ。

二年目にやっと待望の佐藤先生のジイド論がはじま
った。そしてその頃一年後だったろうか私は佐藤先生がN

・H・Kに奉職されていた白井浩司氏をたずねられた折
偶然お供をしたことがある。それが白井先生にお目にか
ゝった最初だったろう。

「白井君に仏文科に来てもらおうと思ってるね」

帰りみち佐藤先生がおっしゃった。私はもちろん、サ
ルトルの「嘔吐」の訳者である白井浩司氏の名前を知っ
ていた。

「いつ、いらっしゃるんですか」

胸をとぎめかせてたずねた。白井浩司氏のサルトル講
義がはじまれば、ジイド論以外、出席する気にもなれな
い仏文科がどんなに楽しくなるだろう。

「残念ながら君が卒業してからだね。」

がっかりしたのは私だけではなかった。十人ほどしか
いなかった仏文科の学生がみな同じ気持でそれなら白井
さんにきて頂き我々だけでサルトルを読んで頂だこうと
いう気持になった。そして御承諾をえて「自由への道」
を教えて頂くことがきまった。

原書が入手困難な時代だったから、私たちは白井さん

から拝借した原書の一部を騰写版で印刷するため日曜日、永戸多喜雄氏の家に集った。(あれは永戸氏の家だったと思うが、記憶はたしかではない)

そしてそれからしばらくして、放課後あいた教室を利用して白井さんに来ていた。先輩の白井さんはその日から私にとっても白井先生に変わった。

我々が断りなしに(?)勉強していることをI教授が知って立腹された。私は無茶だと思った。

もう三十年前の思い出である。以来、三十何年、白井先生にはいろいろとお教え頂きお世話になってきた。三田に遊びにいくたび白井先生にこっそり読書会をして頂いた夕方のことを思いだす。

(作家・昭和二十三年仏文科卒)

白井浩司先生の宿題

薩 摩 忠

白井浩司先生が明年の三月で慶応義塾を定年退職なさ

るとうかがい、いまさらのように月日の流れの早さに驚いている。

わたしどもが慶応の大学予科に入学したのは、昭和二十二年の春のことである。当時は日吉の校舎がまだアメリカ軍から返還されていなかったもので、三の橋のおんぼろ校舎で授業が行われていた。なにしろベニヤ板一枚で仕切られていた教室だったから、後ろの席に坐ると、隣の教室の講義の声がよく聞こえた。このような教室で、わたしどもは、白井先生にアー・ベー・セーを教えていただいたのである。

その頃、先生は、三十歳を少し出られたくらいだったと思う。わたしどもは、試験が近づくと「ジャン・ポール・サルトルの話聞かせて下さい」などと言い出して、試験範囲が増えるのをなんとか阻もうとした。白井先生は、迷惑そうな顔をなさりながらも、時々サルトルのエピソードなどを話して下さったものである。

卒業後も、わたしの場合は、文芸家協会やベンクラブなどのパーティーで白井先生におめにかかる機会を得て